

ヴィルコムルスキー事件再考

柴 嵩 雅 子*

The Wilkomirski Affair Reexamined

Masako Shibasaki *

Abstract

In 1995 Benjamin Wilkomirski published *Bruchstücke (Fragments)*, a memoir of his childhood shattered by the Holocaust. In 1999, however, the highly acclaimed and award winning book was debunked as a work of fiction written by a Swiss who had visited the concentration camps only as a tourist. This scandal is usually cited as a typical case of someone pretending to be a Jewish victim in a bid to draw public attention and sympathy.

To achieve a better understanding of his actions, this paper focuses on three points. First, as studies of cognitive psychology have demonstrated, our memory is far more unreliable than we usually assume. Second, the emotional trauma that the young Wilkomirski had to suffer is often underestimated. Third, it is too simplistic to believe that each and every Holocaust survivor experienced a much worse ordeal than victims of unrecognized crimes.

キーワード

ホロコースト、『断片』、虚偽記憶、『ミーシャ』

はじめに

1995年、ホロコーストの子どもサバイバーとして自伝、『断片——幼少期の記憶から1939-1948』を出版し、高く評価されて注目を集めたビンヤミン・ヴィルコムルスキーは、実は収容所体験などまったくないスイス人で、誕生時の名前はブルーノ・グロージャンであることが判明した。スイスはもとよりドイツやアメリカでもスキャンダルとなり、ヴィルコムルスキー個人が非難されるだけでなく、冷静な判断力を欠いて彼を持ち上げた周囲のあり方も問題視された。20世紀末に起きたこの事件について、本稿では特に虚偽記憶と犠牲者論に焦点を当てて考察したい。

まずヴィルコムルスキーをめぐる論争は日本ではほとんど知られていないので、Iで事

*しばさき まさこ：大阪国際大学人間科学部教授〈2011.5.2受理〉

件のあらままと、『断片』の出版の経緯と魅力について述べる。Ⅱでは、本件を十分に理解するためには不可欠な、虚偽記憶に関する認知心理学の知見を辿る。Ⅲでは、ホロコーストのサバイバーを詐称する他の例を取り上げ、さまざまな犠牲者の中でホロコーストの被害者がもつ特権的な地位について改めて問い直す。なお、以下では原則的にグロージャンではなくヴィルコムルスキーの名を用いるが、それは混乱を避けるためであって他意はない。

I ヴィルコムルスキー事件

1) 概略

ヴィルコムルスキーはチューリヒでクラリネットの演奏・製作・指導に携わっていたが、本人の言によると、ラトビアのリガ生まれのユダヤ人である。幼いとき両親と全ての兄弟をホロコーストのために失い、マイダネク収容所に送られながら辛くも生きのび、クラクフの孤児院で世話を受けた後、スイスの養父母によって育てられたという。『断片』は子どものときの壮絶な体験を、覚えているままフラッシュバックのように綴った「自伝」と謳われていた。

この著書は1995年、ドイツの権威ある出版社ズールカンプのユダヤ部門によって刊行されてから、1999年までに邦訳も含め9ヶ国語に翻訳され、販売総数は7万冊に上った¹⁾。そのうちの3万3千部が英語版である。一般大衆も巻き込むようなベストセラーにはならず、商業的には特筆するほどの利益はもたらさなかったが、初めての著書としてはなかなかの成功で、各方面から賞賛の声が上がった。たとえば、アメリカの政治学者、ダニエル・ゴールドハーゲンの、「ホロコースト文学に精通した人でも、人の心をとらえるこの本から学ぶことがある。誰しも心を深く揺さぶられるだろう」という評が、1998年に出たドイツ語文庫版の背表紙を飾っている。アメリカでは全米ユダヤ書籍賞（自伝・回想録部門）、イギリスでは「ジュエイツシュ・クォーターリー文学賞」、フランスでは「ショアーの記憶賞」を受賞した。ヴィルコムルスキーは著者として朗読会を開催するだけでなく、大学で講演するなど、いわば子どもサバイバーの代表者の役割を果たしていた。

ところが1998年、ダニエル・ガンツフリートがチューリヒの週刊誌『ヴェルトヴォッヘ』で「借り物のホロコースト自伝」を発表し、ビンヤミン・ヴィルコムルスキーは実はスイス人のシングルマザー、イヴォンヌ・グロージャンの息子で、後にデセカー夫妻の養子となったブルーノであり、収容所には旅行者として行っただけだと弾劾した。当初、ヴィルコムルスキーは脅迫に負けないと自説に固執していた。ホロコーストの本当の子どもサバイバーを含め、彼の味方をする人たちもいた。しかし、発言の矛盾や『断片』の歴史的誤りの指摘が相次いだため、出版社は改めてスイスの歴史家、シュテファン・メクラーに調査を依頼した。多くの関係者にインタビューし、歴史的事実とヴィルコムルスキーの言説を綿密に比較してメクラーが2000年に発表した結果は、やはりビンヤミン・ヴィルコムルスキーはブルーノ・グロージャンだとするものだった。これが真実であることは、2002年に行われた、イヴォンヌ・グロージャンとかつて交際しヴィルコムルスキーの実父にあたるルードルフ・Z氏とのDNA検査でも証明されている²⁾。

2) 『断片』の誕生

それまで50年以上スイス人として暮らしてきた人が、いきなり「本当は私はユダヤ人で、幼いときに収容所に入れられていた」といった回想を書いても、誰も相手にせず出版などできなかつたらう。以下、メクラーの著書『ヴィルコムルスキー事件』と論文「犠牲者ヴィルコムルスキー」によって辿ってみよう³⁾。ヴィルコムルスキーの場合、1960年代中ごろには自分はユダヤ人だと言い始め、歴史書を漁るだけでなく通訳つきでポーランドを何度も訪れるなど、幼い日々の足跡を探求していた。『断片』の後書きで、ヴィルコムルスキーは「長年にわたって研究を続け、自分の体験が起きたと思しき場所をたびたび訪れるとともに、専門家や歴史家と何度も話をした」⁴⁾と記しているが、それは嘘ではない。文献のみならず実地調査によっても、彼は第二次世界大戦中のユダヤ人の子どもの運命、とくにポーランドの孤児院については、かなり詳細な知識を得ていた。クラリネットを習いに来たのをきっかけに親友となったユダヤ人で心理学者のエリツール・ベルンシュタインは、1980年、手術後のヴィルコムルスキーがうわごとでイディッシュ語を話すのを耳にしているほどである。

かねてより悩まされていた悪夢がひどくなった1990年代の初め、ヴィルコムルスキーはそれまで嫌がっていた心理療法を受けるようになり、セラピーの一環として記憶を書き留め始めた。治療に当たったのはモニカ・マッタだが、ベルンシュタインも心理学者また友人として書くことを強く勧めた。そうして出来上がった文章を、ヴィルコムルスキーは最初、公刊するつもりなどなかったという。しかし、同じように苦しんでいる子どもサバイバーのためになるからと促され、1994年1月、エージェントのエーファ・コラルニクに原稿を渡す。この種の回想録としてはきわめて珍しいことだが、早くもその年の7月にはズールキャンプから公刊されることが決まった。これはこの本がそれだけ人を惹きつける内実を擁している証拠である。

同じ1994年にヴィルコムルスキーは生まれ故郷と目したリガに足を運び、さらに歴史家のレア・バリントの研究に基づく記録映画、『ワングのリスト』作成にも協力した。ポーランドのゲッターにいた児童を、非ユダヤ人の家庭や施設に預けるのを助けたワングは、そうした子ども達のリストを保存していた。それを手がかりに生き残った人々を追いかけたドキュメンタリーに、ヴィルコムルスキーはリストに載っていないにもかかわらず出演した。彼は自分も同様にホロコーストゆえにアイデンティティを失ったと訴え、バリントもそれを少しも疑わなかったからである。

しかし、『断片』の出版を間近に控えた1995年2月、『新チューリヒ新聞』文芸欄の元主任、ハノ・ヘルビングから、ヴィルコムルスキーは実はホロコーストの犠牲者ではないので、「小説」としてならともかく本物の回想として出すのは危険だ、という警告が寄せられた。出版社はあわてて出生証明書やスイスへの帰化に関する文書など、彼の生い立ちが著書の通りだと裏付ける証拠を求めた。しかし提出されたのは、彼の話は本当だと請け合うベルンシュタインとマッタの手紙であった。そもそも真の出自を隠して生き延びた人々に関しては、行政機関が作成した文書が存在しない、あるいは当てにならない。そうした境遇のユダヤ人の歴史の専門家であるバリントも、ヴィルコムルスキーは本物だと太鼓判

を押したことから、『断片』は出版されることに決まった。

3) 『断片』の魅力

1997年に出版された日本語版の訳者、小西悟は「あとがき」で、「第二次世界大戦中のショア（ユダヤ人大虐殺）の恐怖の証言として、これほど生々しいものはこれまでもなかったし、おそらくこれからもありえないのではあるまいか」⁵⁾と記している。さらに1998年、青少年向けの読書案内として鎌田慧が出版した『生きるための101冊』には、「地の巻——歴史から学ぶ」という項目の中に、原民喜の『夏の花』やソルジェニツィンの『イワン・デニソビッチの一日』などとともに、『断片』が紹介されている。「ナチスの『絶滅収容所』にいれられ、ホロコースト（大量虐殺）から奇跡的に生還した少年が、遠い記憶を蘇らせながら書かれた（ママ）自伝的な小説である。著者にとって、記憶の断片をあつめることが、自己回復であり、生きることだった」⁶⁾。

フィクションだと分かった後でこうした掛け値なしの絶賛を読むとおかしく感じるが、あながちこうした礼賛者を批判することはできない。先述の通り、多くのホロコースト回想録にはなかなか買い手が見つからないにもかかわらず、ヴィルコムルスキーの原稿には出版社が飛びついた。それは『断片』に描かれた数々のエピソードが、読む者に強烈な衝撃を与えるからである。

その例をいくつか挙げよう。まず、強制収容所で放置されていた女性の死体の腹部が動くのを見たとき、幼いヴィルコムルスキーは度肝を抜かれる。「『赤ちゃんがおなかで動くの。そしたらお母さんは、赤ちゃんが出たがっているなって分かるのよ』と、年長の女の子が以前、大バラックで言っていた。僕らがまだみんな一緒だったころだ。じゃ、赤ちゃんがあのおなかから出ようとしているのかな？ どうしたら、そんなことができるんだろう？ あの子の人は死んでいるのに！」⁷⁾。もっとよく見ようと彼が近づいたとたん、死体の「傷口が開き腹の皮がめくれて血にまみれてギラギラした巨大なねずみが一匹、死体の山をサッと下りてゆく。他のねずみも驚いてもつれ合った死体の山からあわてて逃げ出す。見たぞ、見たぞ！ 死んだ女の人はねずみを生むんだ！」⁸⁾。むごたらしい情景と子どもっぽい解釈が、不気味なコントラストを作り出している。また、幼児が飢えの余り、自分の指を骨までかじってしまったという凄まじい話もある⁹⁾。土手を覆う無数の裸の死体をかき分け乗り越えた末に語りだされる、「ここは、この世がこの世であることを止める場所なのだ」¹⁰⁾という言葉は、読者の脳裏に焼きついて離れないだろう。

戦後、養父母のもとから学校に通っていたヴィルコムルスキーは、授業でどんなスイスの英雄の話を知っているか尋ねられ、考え込む。「僕はどこかで『これがドイツ帝国の英雄である』と小耳に挟んだことがある。それは黒い制服の連中のことだった。じゃあ、ここにも英雄がいるのだろうか。英雄とは、人を殺す奴のことではないのか」¹¹⁾。先生がウィリアム・テルの名場面を描いた壁掛けを指すと、テルの話など聞いたことのなかったヴィルコムルスキーは、驚愕する。人殺しであるはずの「英雄」が、奇妙な武器で子どもを狙っていたからである。先生にこの絵を説明するよう促されると、彼はためらいながら、「SSの隊員が、子どもを撃っています」¹²⁾と答える。

こうしたエピソードは、事実か否かを疑問に思う前に、忘れがたいイメージを読み手に残す。ホロコースト文学の専門家、ローレンス・ランガーは一読して、『断片』は自伝ではなくフィクションだと見抜いていたが、著者については「相当の描写力を備え、鋭い眼力でホロコーストにおける惨事のグロテスクな詳細を引き出している」¹³⁾と語っている。

「なぜ、僕だけが、いつも一人とり残されるのだろうか？」¹⁴⁾、「僕らは生きている人たちに混じってやってきたけれど、でも本当に彼らの一員になってはいない。本当は僕らは死人で、許されていない休暇をとって、生きている人の間に間違っているとどまっているだけなんだ」¹⁵⁾というように、『断片』全体から、周囲の普通の人々に対する違和感や孤独感が滲み出している。「大人が子どもに優しくするときは危ないんだ」¹⁶⁾、といった大人に対する根深い不信感もいたるところで表現されている。こうした強烈な疎外感を抱くのは、決して第三帝国で迫害を受けた人に限られてはいない。虐待を受ける、犯罪に巻き込まれる、身体的精神的な障害がある、といった特別な理由がなくても、思春期には多くの人が命令的な大人に不満を抱いたり周囲になじめなかったりして苦悩する。そうした心情を巧みに表現していたからこそ、知識人やホロコーストの体験者も『断片』を絶賛したのである。

Ⅱ 記憶の不確かさ

1) 心理学における論争

スイスという中立国で空襲も飢えも体験せずに生活してたくせに、ナチの強制収容所を辛くも生き延びたと称するなど、ヴィルコムルスキーは卑劣な詐欺師だと批判されるかもしれない。あるいは、ヴィルコムルスキーの場合、本人も半ば本気でユダヤ人だと信じ込んでいた節もあり、そうなる詐欺師ではなく、精神異常者と見なされるかもしれない。しかし、記憶というものは、通常、人が信じているほど正確なものではない。その点を確認しておこう。

『断片』が出版・翻訳された1990年代半ばは、欧米では記憶回復療法に関する論争が最高潮に達した時期でもある。まず、1980年代末から性的虐待の告発がブームとなった。火付け役となったのは、1988年にエレン・バスとローラ・デイビスが出版した『生きる勇気と癒す力』である。もともとレイプされた記憶など全くないのに、この本を読んで、もしかしたら自分も子どもの時に被害にあって、ただ忘れていただけなのかもしれないと感じた多くの読者が、セラピーを受けるなどして、幼児期に父親にレイプされたことを「思い出した」。従来、軽視されてきた性的被害の深刻さを訴えるフェミニズムにも支えられ、成人になった娘が、蘇った記憶を理由に実父を性的虐待で訴える事件が相次いだ。バスとデイビスはフェミニズムの活動家であり、心理学に関しては素人だが、精神医学の大御所で『トラウマと回復』の著者、ジュディス・ハーマンなども、この告発運動を後押しした。

当初、世間の反応は告発する女性たちに味方していた。いたいけない子どもに対する性的虐待はおぞましい犯罪である上、苦しみながら被害者が思い出した凄惨な内容に対して疑念を抱かなかったからである。裁判でも被告の父親や児童施設の男性指導員らが有罪になった。しかし、かわいがった娘によって身に覚えのない犯罪で訴えられ、名声もキャリ

アも失い、何より娘との絆を失った親たちも黙ってはいない。1992年には「虚偽記憶症候群対策財団(FMSM)」が設立され、真実の究明が始まった。また心理学の専門家も、蘇った記憶は全面的に信頼できるものではないことを訴え始めた。

認知心理学の分野では同じ1992年に、アーリック・ナイサーとニコール・ハーシュが、「強い感情を伴う記憶は正確だ」という神話を否定する研究を発表していた¹⁷⁾。1986年、宇宙からの授業を行なうために、初めて民間の学校の先生を搭乗させたスペースシャトル、「チャレンジャー号」が、子どもたちを含め多くの人々が現場やテレビで見守る中、発射後すぐに爆発した。ナイサーとハーシュはエモリー大学で心理学を受講している学生の協力を得て、この事故を利用した巧妙な実験を行なったのである。まず、爆発のニュースをいつ、どこで、どのようにして知ったか、そのとき一緒にいた人は誰かを、事故の翌日に書いてもらう。この文書はほぼ正確に、ニュースに初めて触れた状況を記していると考えられる。次に2年半後、先の調査に参加し、なお在学している学生に同じ質問を繰り返す。最初の結果と比較すると、25%もの被験者の記憶が完全に間違っていた。たとえばある学生は、「宗教の授業に出ていたら、後から入ってきた人たちがそれぞれについて話し始めた。細かいことは分からなかったが、チャレンジャー号が爆発したことは分かった [中略]。授業が終わってから、自分の部屋に行ってテレビで話しているのを見て、詳細を知った」と書いていたが、2年半後の記憶は、「最初に爆発について聞いた時、私は新入生寮の部屋にルームメイトと一緒にいて、テレビを見ていた。ニュース速報があって、二人ともショックを受けた。私は本当にうろたえて、2階の友人に話しに行き、それから両親に電話をかけた」に変容していた。事故後、他の場所で体験したことが入り込み、内容が入れ替わってしまったのだ。また、食堂でニュースを聞き、ショックでランチを食べられなかったと言っていた被験者は、後には「寮の部屋にいたら、女の子が『スペースシャトルが爆発した』と叫びながらホールを走ってきた」と言い出した。ここには想像が紛れ込んでいる。記憶の変容とともに実験者たちを驚かせたのは、記憶の正確さに強い自信を持っている被験者も、同様に間違っていたということである。さらに半年後に行われたインタビューで、自分の記憶と異なる最初にした文書を見せられても、被験者はその内容を全く思い出せず、一様に信じられないと驚いた。すなわち本人がどれほど正確に覚えていると強弁しても、その記憶が正しいと信頼できるわけではないのだ。逆に言うと、私たちは実際とは違うことでも、本当だと確信してしまうのである。

ナイサーたちの実験は、あくまで実際に起きた事件に関する記憶の変容を扱ったものだが、エリザベス・ロフタスはそこから一歩進んで、まったくありもしない出来事の記憶を植えつけられることを実験で証明した¹⁸⁾。被験者は子ども時代の4つの出来事を書いたノートが渡され、それぞれについて思い出すことを書く。4つのうち3つはあらかじめ家族から聞いた本当の話だが、1つは5歳の頃ショッピングモールで迷子になり、泣いていると老人が助けてくれて家族と再会できたというストーリーで、こちらは実際には起きなかったことが家族によって確かめられている。18歳から53歳までの24人が参加し、そのうち6人もが、この架空のストーリーを実際に起きたと認めるだけでなく、ノートに書かれていなかった詳細を補った。なおかつ当人はあくまでそれは記憶だと信じ込んでいた。「実

際には起こらなかった事件でも、思い出すように仕向けることが可能である。この種の歪曲が生じるとき、人々は時に歪曲した記憶や間違った記憶に自信を持ち、思い出した虚偽の内容をかなり詳細に表現することもある」とロフトスは述べている。全くなかったことでも、私たちはちょっとした暗示で、本当にあったと思い込んでしまうのだ。記憶論争の流れを変えたこのショッピングモールの迷子の実験に関する論文、「偽記憶の形成」が発表されたのは、『断片』の原著が出版されたのと同じ1995年である。

実際に体験したことと、単にありありと想像したこととの区別は、それほど明確ではない。ある対象物を鮮明に想像すると、現実に見たのか、それとも想像しただけなのか、識別が困難になる場合もある。アメリカには、自分はエイリアンに誘拐されたと感じている人（アブダクター）が少なからず存在するが、『なぜ人はエイリアンに誘拐されたと思うのか』の著者、スーザン・A・克蘭シーによると、人口の4%ほどの人は専門的な意味で「空想傾向」があり、本物のように感じられる視覚心像を作り出すことができる¹⁹⁾。彼らは他の人に比べ空想傾向が強く、情報源を識別するのが難しいため、偽りの記憶を作りやすい。つまり、自分が本当に体験したことと、考えたり想像したりしただけのこと、さらには映画や本やテレビで知ったこととの区別が、つかなくなりがちなのである。

しかし、ありもしなかったことを「覚えている」場合があるとされても、なかなかそれは受け入れがたい。記憶は生き生きしており、リアルに感じられるからだ。また自分の体験の記憶が信用できなくなると、アイデンティティの根幹が揺るがされてしまう。実証的研究が積み重ねられてきた現在でも、新しい記憶理論はまだ社会には浸透していない。ましてや1990年代初めまで、記憶回復療法を支持する学者、セラピスト、クライアントだけでなく一般の人々も、記憶というと、自分の体験を映したフィルムが頭の中に保存されていると考えていた。心に深い傷を残す記憶は、意識するには余りに耐えがたいので本人が忘却していても、心の奥底にそのままの形で残されており、カウンセリング、ビジュアライゼーション、グループセラピー、催眠、薬物などによって思い出せると前提していた。そうした状況を背景に『断片』は生まれ、かつ読まれたのである²⁰⁾。

2) 本物のサバイバーと虚偽記憶

真性のホロコーストの被害者であっても、記憶の錯誤は起こりうる。ローレンス・ランガーが紹介しているある生き残りの女性Aは、本人の証言によると、ウィーンのユダヤ系病院で働いていたが、1941年10月、患者とともにテレージエンシュタット収容所に入れられた。そこで赤十字査察官が訪問するのを見たすぐ後、アウシュヴィッツに移送され、シャワー室兼ガス室に放り込まれたものの、幸運なことに「ドイツ人はガスの代わりに水の栓を回すことにしてくれた」²¹⁾。4年半の間に、5回同じようなことがあり、いつもガスではなく水が出てAは救われた。やがてアウシュヴィッツからフロッセンビュルクの基幹収容所に移され、さらにマウトハウゼンに送られた。1945年5月5日、SSの看守に強いられ、Aや他の囚人はふもとのバラックから採石場の階段を上ってガス室に入り、死を待っていた所にアメリカ軍が来て命拾いをしたという。

ナチスの蛮行に詳しい人なら、一読しておかしいと感じるだろう。そもそもテレージエンシュタットが赤十字に公開されたのは1944年なので、アウシュヴィッツにいた期間が4年半に及ぶはずがない。またアウシュヴィッツのガス室では、ガスはシャワー口から出るのではなく、チクロンBの缶が部屋に放り込まれる。テレージエンシュタット収容所の記録によると、Aと同じ名前の女性が1943年6月、ウィーンから到着している。彼女は確かに1944年10月10日にアウシュヴィッツに移送されたが、10月12日にはフロッセンビュルクの基幹収容所ではなく付属収容所に着いている。つまり彼女はアウシュヴィッツには中継地として2日間いたに過ぎない。また彼女がマウトハウゼンにたどり着いたのは1945年4月29日だが、その前日でガス室の利用は終了している。

どうにも珍妙な話であるにも関わらず、Aは20年近く、学校やシナゴークでこの「体験談」をしてきた。彼女の証言に基づいて作成されたドキュメンタリー映画は、地元のテレビでも放映された。それを機にホロコーストの生き残り数名が信憑性に疑問を呈したので、ランガーの所へ鑑定の依頼が舞い込んだのである。ランガーは、人々が長期にわたってAの話の信じてきた理由を、次のように推察している。「サバイバーはしばしば非常に尊敬され賞賛されているので、畏敬の念を抱いた一般の人々は批判的意識が麻痺してしまい、サバイバーが話したことなら何でもそのまま受け入れてしまうのだろう」²²⁾。

第三帝国で迫害を受けたユダヤ人の証言を額面どおりに受け取ってしまう理由は、他にも考えられる。第一に、ホロコーストでは常識では信じられないようなことが起きていたという認識である。アウシュヴィッツではガス室で一度に大勢のユダヤ人を殺害し、焼却炉で効率よく死体の処理を行っていた。他方で、映画『戦場のピアニスト』で有名になったように、思いがけずドイツ軍将校の助けによって生きのびた音楽家ウワディスワフ・シュピルマンのような例もある。そのため、一般社会ではとてありえないようなことでも、ナチ・ドイツにまつわる話なら信じてしまうのである。第二に、地獄のような迫害を受けたと自ら語っている人に対して、嘘ではないかと疑い、真実を語っているか問うことだけでも、まさにセカンドレイプを犯すことになりかねないという懸念がある。そうした気遣いから、ホロコーストの犠牲者の証言に対しては、よほどの自信がない限り、異議を唱えることはむずかしい。最後に、そもそも真実の追究よりも情緒的な共感を重要視する人は少なくない。そのような人々にとり、客観的な事実か否かということはさして重要ではなく、感情移入できるストーリーであれば、虚構であっても構わないのである。

Ⅲ 被害者のヒエラルキー

1) ホロコーストの偽サバイバー

ナチの迫害を実際に受けた人でも、意図せずして記憶に間違いが生じてしまう場合はある。その一方で、世間の注目や同情を集めるために、意識的にホロコーストのサバイバーを詐称する人もいる。たとえばミーシャ・デフォンスカは1980年代末より、自分はユダヤ人で、少女時代、ナチに両親を殺された後、オオカミに助けられながら、たった一人でベルギーからウクライナまで徒歩で旅した、という話をしてきた。1997年にはまず英語で『少女ミーシャの旅』が出版された。内容の信憑性に問題があったが、創作だと断定する決定

的証拠がないまま、2005年に出たフランス語の『ミーシャ——ホロコーストと白い狼』はベストセラーになり、映画化までされた。ところが2008年になって、アメリカの系図学者、シャロン・サージャントが、ミーシャ・デフォンスカは実はモニーク・ヴァエルという非ユダヤ人だということを突き止めた。ヴァエルはヴィルコムルスキーとは異なり、ミーシャの物語は虚構であることをあっさり認めた。

ただし彼女は、まったくの無からドラマチックな逃避行の物語を捏造したわけではない。ヴァエルの両親はベルギーの抵抗運動のメンバーだったため、彼女が4歳のとき逮捕され、移送の後、殺害されている。父親が拷問を受けて他のメンバーの名前を漏らしたと疑われていたため、彼女は身を寄せた家でも「裏切り者の娘」として冷たく扱われたという。「実際とは異なるが、私の現実であり、私なりのサバイバルのやり方」²³⁾として、彼女はミーシャの物語を紡ぎだしたのである。

ヴィルコムルスキーに関係する詐称の例で有名なのが、ローラ・グラボフスキーである。1997年ごろ、ロサンゼルスで子どもサバイバーの自助グループに顔を出すようになった彼女が周囲に明かしていた生い立ちは、1941年ごろポーランドに生まれ、ビルケナウ収容所に送られてナチの医師の実験台となったが、その後クラクフの孤児院で過ごし、1950年ごろアメリカへ来て非ユダヤ人の養子となった、というものだった。『断片』を読んで感動し、自分も同じ場所にいたとヴィルコムルスキーに書き送ると、ヴィルコムルスキーも、ブロンドの髪でローラという子がいたことを覚えていると応じた。こうした縁で、1998年にヴィルコムルスキーがロサンゼルスにやってきた際、二人は共同でインタビューを受け、ホロコーストの子どもサバイバーのためにコンサートも催した。

しかし1999年、アメリカの福音主義教会関係の雑誌『コーナーストーン』に、グラボフスキーの正体を暴く、「ローレン・ストラットフォード——悪魔儀式的被害からホロコーストのサバイバーへ」²⁴⁾が掲載される。それによるとグラボフスキーはユダヤ人ではなく、本名はローレン・ストラットフォードであり、しかもかつてはホロコーストの生き残りとしてではなく、悪魔儀式的被害者として世間の注目を集めていた。その「体験」を綴った『悪魔の地下組織』が1988年に出版されている。しかしそれもまた、同じく『コーナーストーン』で1989年に発表された「悪魔の余興——ローレン・ストラットフォードの物語」が詳細に検証しているように、全くの虚構だった。こうした前科からして、彼女が計画的にホロコースト被害者の履歴を作り出したことは否定できない。

2) 犠牲者としてのヴィルコムルスキー

ヴィルコムルスキーもミーシャやグラボフスキーと同様に、ホロコーストの偽サバイバーだと一般には考えられている。ドイツ語圏で「ヴィルコムルスキー症候群」²⁵⁾という、人に認められたい同情されたいするために、苦難に満ちた過去を作り出して犠牲者になろうとすることを意味する。またアメリカの社会心理学者、キャロル・タヴリスとエリオット・アーロンソンが2007年に出版した『なぜあの人はあやまちを認めないのか』もヴィルコムルスキーを取り上げ、次のように解説している。「長じてからヴィルコムルスキーは、今、自分が抱えている問題の根源は幼年時代にあると結論付けた。おそらく本当

にそうだったのだろう。しかしながら、母親がシングルマザーのため子どもの養育ができず、結局、親切だが厳格な夫妻の養子になったという、余りにありふれたストーリーでは、自分の苦難の説明としてはパッとしない。〔中略〕実際のところ彼は最初、幼い頃のトラウマ体験を全く覚えていなかった。記憶に取り付かれるにつれ、幼児期はますますつかみどころがなくなっていった。ヴィルコムルスキーはホロコーストについて読み始めた。その中にはサバイバーの話も含まれていた。そして自分をユダヤ人と同一視するようになった²⁶⁾。二人の著者はメクラの『ヴィルコムルスキー事件』を引用しているが、そこで詳述されている幼いヴィルコムルスキーの境遇をまったく考慮していない。英語版とドイツ語版両方のウィキペディアでも、彼は誕生後、「スイスのアーデルボーデンの児童施設に送られ、そこからチューリヒの裕福で子供のいないデセカー夫妻が引き取り、その後養子にした」としか書いていないので、ヴィルコムルスキーにはトラウマ体験など全くないと思ひ込む人が多いのだろう。

しかし、メクラの著書からは、幼児期の悲惨な日々が浮かび上がる。ヴィルコムルスキーことブルーノ・グロージャンは、1941年2月12日に誕生したが、2歳になる直前の1943年2月1日には、子供のいないシュリップ夫妻の元へ預けられる。しかし1年もたたない1943年12月にはロッセル家に移される。そこも半年ほどしか続かず、1944年6月11日、今度はエーバーハルト家に行く。しかしエーバーハルト夫人が精神的に不安定で怒りの発作で物を壊したりするため、9ヵ月後の1945年3月8日にはアーデルボーデンの児童施設に収容される。そのとき彼はまだ4歳になったばかりである。脳が猛スピードで発達し、言葉を話し始め、人との親密な信頼関係を築く力が作られる正にその時期に、彼は見知らぬ人の家をたらい回しにされていたのである。

大人でも、これだけ次々に違う人と違う場所で暮らせば大変なストレスになるだろうが、子どもの場合、影響はさらに深刻である。小児精神科医の奥山眞紀子は、大人とは異なる子どものトラウマについて、次のように述べている。「大人からは一見たいしたことがない体験とみえても、子どもにとっては重大な恐怖体験であることは少なくない。たとえば、幼児期早期の子どもが迷子になる体験である。子どもは一人では生きていけない存在である。守ってくれる人がいなくなることはすなわち生死にかかわる体験になってしまうのである。周囲の大人がすぐに気づいて守り、親を探し出してくれるときはまだよいが、長時間にわたって1人で置かれたときには自我の処理範囲を超えた恐怖体験となる。特に恐怖体験のときにアタッチメント対象から見放されたと感じたときには、その恐怖感はより強くなる。〔中略〕子どもの場合、客観的な事件の大きさではなく、子どもも独特の恐怖感、つまりアタッチメント対象との分離や喪失への恐怖に注意が必要である」²⁷⁾。

幼いヴィルコムルスキーにとって、特にエーバーハルト家での体験がトラウマになったことは明らかである。当時18歳だった息子のルネによると、エーバーハルト夫人の行動は予期不可能で、突然怒りの発作を起こすと何でも破壊するが、それも急に終り、座り込んですすり泣いたりもする。「母が一旦激怒すると、大混乱だった」と息子が言うぐらいで、そのような時、3歳のヴィルコムルスキーは「這って隅に逃げ込みおびえていた」²⁸⁾。これではよくないということで、ヴィルコムルスキーを受け入れるのを止めたのである。ち

なみにエーバーハルト夫人はその後、精神科の治療を受けていたが、入院中に自殺している。

エーバーハルト家でのトラウマ体験は、形を変えて『断片』に登場する。「兄たち」という章で描かれている厩や納屋のある農場は、自分たちの家の様子に酷似しているとルネはメクラーに語った。また「太い腕と重いこぶしをもち、たくましくて大きく」、「とても腹を立てて残酷になることもある」が、時に「着物はずたずた、髪の毛はぼさぼさで、部屋の真ん中で泣く」農婦というのは、まさにエーバーハルト夫人を正確に映し出しているという²⁹⁾。さらに最年長の兄モッティは、おそらく自分のことだろうとルネは推察している。地下室への光の差し込み方の描写も的確で、ルネもメクラーも幼いヴィルコムルスキーの記憶の正確さに舌を巻いている³⁰⁾。

ヴィルコムルスキーは4歳で児童施設に入ったとき、母親の顔をもう覚えていなかった。父親とは生まれてから会ったこともない。自分の親がどんな人かわからないというのは、アイデンティティ形成に破壊的な影響を及ぼす。詳しい調査をしてヴィルコムルスキーの出自を熟知していたメクラーは、非常に同情的な結論を出している。「医者の家系を継がせたいというデセカー夫妻の願望は、あらかじめブルーノの発達を拘束するものであった。夫妻の親戚の中には、遺産問題のためにブルーノに敵対的な人もいた。彼の過去は養父母によってタブーとされてしまったので、事実上、自分の出自について空想にふけることを余儀なくされたのだ。実母と会うことも公に禁じられていた。[中略] 彼がデセカー家に引き取られたのは5歳の時であるのに、養子縁組がまとまったのは12年後である。そのため彼はずいぶん遅くまで本当の家族を見いだせなかつただけでなく、非常に長いあいだ不安定な立場に置かれていたのである。ヴィルコムルスキーは養子であることをうまく受け入れようとしたとき、考える限り最悪の条件を経験したことになる。こうした苦境がもともとのトラウマを悪化させ、空想の世界へ逃れる必要性を強化したことは、私には明らかに思える」³¹⁾。

3) ホロコースト被害者の特権的地位

もちろん、ヴィルコムルスキーが幼いときに大変辛い思いをしたからといって、ホロコーストの被害者を名乗らせ続けるわけにはいかない。彼を支援した子どもサバイバーも存在したとはいえ、事実無根の迫害体験を語る偽者がいると、本物の証言も疑いの目で見られてしまう。偽の証言の存在は、ホロコーストなどなかったと言い立てる歴史修正主義者の格好の論拠になる。それゆえヴィルコムルスキーの主張の誤りは当然、正されなければならない。

ここで問題にしたいのは、彼の嘗めた辛酸など、第三帝国が占領したヨーロッパでユダヤ人が体験した迫害と比べれば取るにたりないと、多くの批判者が決め付けている点である。確かに、ナチ・ドイツによるユダヤ人の大虐殺は、養父母による養育などとは次元の異なる大事件である。加害者と被害者はヨーロッパ中に広がっており、またユダヤ人の移民先なども考慮すれば、その影響範囲はさらに広がる。ホロコーストは教科書に掲載され学校で教えられるだけでなく、関連する博物館も各地にある。しかし、そうした歴史的な

大事件に巻き込まれ、からくも生き延びた一人一人の苦しみ、ヴィルコムルスキーあるいは無名の犯罪の被害者が体験する苦難より必ず大きいとは限らない。

なぜなら、第一にホロコーストのサバイバーと言っても、こうむった被害内容は人によって非常に異なるからである。ナチの強制収容所にしても、たとえばアウシュヴィッツとグッハウでは囚人の待遇がまるで違う。たとえ同じ収容所であっても、医学や音楽や機械などに関する技能を持っていて特殊な仕事につけた人は、戸外での労働を強いられた人と比べ、肉体を酷使せずすみ、看守による虐待を受ける確率も低かった。さらに、収容所に移送されたときの年齢、健康状態、家族の状況によっても、トラウマの強度は左右される。

第二に、ホロコースト以上に、実存を粉碎するような激しい懊悩を引き起こす体験がこの世には存在するからである。先述のように、記憶回復療法が流行し、よみがえった虚偽の記憶に基づいて多くの女性が実父の性的虐待を訴えたが、濡れ衣で加害者とされた父親の中にはホロコーストの生き残りもいた。彼らは「子どもをこんな形で失うのは、強制収容所で耐え忍んだことよりも辛い」と語っている³²⁾。SSによって受けた非人間的な扱いが肉体的、精神的にどれほど耐え難かったとしても、自分自身は無辜の犠牲者だという倫理的な矜持は奪われない。しかしレイプ容疑で自分の実の娘に訴訟を起こされ、周囲からはおぞましい変質者として扱われると、そうしたプライドは崩れてしまう。そのような体験は飢えや重労働、看守による暴行や罵詈雑言以上に、人間の核心を損なってしまうのである。

被害のそうした個別事情まで人々が想像することはまずない。どれほど凄惨な犯罪や自然災害が起きて、被害者数が少なければ世間はすぐに忘れてしまう。しかし阪神淡路大震災や同時多発テロのように何千人もの死者が出れば、毎年、大規模な慰霊祭が挙行され、有名人が出席し、メディアもそれを報道する。無名事件の被害者や遺族は、喪や悲嘆を誰とも共有できないが、大事件なら犠牲者仲間が存在する。

ホロコーストのサバイバーは、その意味ではきわめて特権的な地位を占めていると言える。だからこそ、ヴィルコムルスキーは他ならぬホロコーストのサバイバーであると思ひ込みたがったのだ。すでに確立した周知の犠牲者集団にもぐりこめば、孤独を癒せる。それは、犠牲者であることにおいても、人間は人とのつながりを求めることを表している。ホロコーストの子どもサバイバーは、「一人ぼっちではないことを、知ってもらいたい」³³⁾という言葉で、『断片』の後書きは締めくくられているが、結局「一人ぼっちではない」ことこそ、ヴィルコムルスキー、そして多くの災害や犯罪を乗り越えて生きている人々が希求していることなのである。

注

- 1) Laurence L. Langer. *Using and Abusing the Holocaust*. Bloomington: Indiana University Press, 2006, p.49.
- 2) 'Wilkomirski vom Vorwurf des Betrugs entlastet' Neue Züricher Zeitung Online (www.nzz.ch/2002/12/12/zh/newzzd9mmpi8t-12_1.446213.html)

- 3) Stefan Maechler. *The Wilkomirski Affair: A Study in Biographical Truth*. Trans. John E. Woods. New York: Schocken Books, 2001, p.84 – 110. Wilkomirski the Victim — Individual Remembering as Social Interaction and Public Event, *History & Memory* Volume 13, Number 2, Fall/Winter 2001.
- 4) Binjamin Wilkomirski. *Bruchstücke: Aus einer Kindheit 1939-1948*, Berlin: Suhrkamp, 1998, S. 143. リガ出身で姓が同じことから遠戚である可能性のあったアメリカ人の家族とも、ヴィルコムイルスキーは密接な交流をしていた。この点については、以下の本を参照。Blake Eskin. *A Life in Pieces*. New York/London: W. W. Norton & Company, 2002.
- 5) ビンヤミン・ヴィルコムイルスキー、小西悟訳、『断片——幼少期の記憶から 1939 – 1948』、大月書店、1997年、181ページ。
- 6) 鎌田慧、『生きるための101冊』、岩波書店、1998年、98ページ。
- 7) Binjamin Wilkomirski. *ibid.*, S.81.
- 8) *ibid.*, S.81.
- 9) *ibid.*, S.67f.
- 10) *ibid.*, S.89.
- 11) *ibid.*, S.119f.
- 12) *ibid.*, S.120.
- 13) Laurence L. Langer. *ibid.*, p.50.
- 14) Binjamin Wilkomirski. *ibid.*, S.21.
- 15) *ibid.*, S.77.
- 16) *ibid.*, S.19.
- 17) Ulric Neisser and Nicole Harsch. Phantom flashbulbs: False recollections of hearing the news about Challenger (Print Publication Year: 1992). Online Publication Date: March 2010 Online ISBN: 9780511664069 cogs.nbu.bg/memory/neisser.pdf -
- 18) Elizabeth F. Loftus and Jacqueline E. Pickrell. 'The Formation of False Memories.' *Psychiatric Annals* 25:12/ December 1995.
(users.ecs.soton.ac.uk/harnad/Papers/Py104/loftusmem1.pdf -)
- 19) スーザン・A・克蘭シー、林雅代訳、『なぜ人はエイリアンに誘拐されたと思うのか』、早川書房、2006年、191～194ページ。
- 20) 逆に『記憶の犠牲者——性的虐待の告発と破壊された生活』（注32を参照）の著者で「蘇った記憶」の虚構性に詳しいマーク・ベンダーグラストは、『断片』が自伝であることに疑問を持ち、ホロコーストに関する3人の専門家、エリ・ヴィーゼルとローレンス・ランガーとラウル・ヒルバークに意見を求めている。以下の論考を参照。Mark Pendergrast. 'Recovered Memories and the Holocaust'
(www.stopbadtherapy.com/experts/.../fragments.shtml -)
- 21) Laurence L. Langer, *ibid.*, p.97.
- 22) Laurence L. Langer, *ibid.*, p.98.

- 23) Blake Eskin. 'Crying Wolf.' (<http://www.slate.com/id/2185493>)
- 24) Bob & Gretchen Passantino and Jon Trot. 'Lauren Stratford: From Satanic Ritual Abuse to Jewish Holocaust Survivor.' (First published on Cornerstone Magazine Online October 13, 1999. www.cornerstonemag.com/features/iss117/lauren.htm)
- 25) たとえばヴォルフガング・ホイヤーの論文、「ヴィルコムイルスキー症候群——偽造されたライフストーリー」（東京外国語大学海外事情研究所編、『クヴァドランテ』、2007年、第9巻）では、ヴィルコムイルスキーは「病理学的ペテン師」と呼ばれている。
- 26) Carol Tavris and Elliot Aronson. *Mistakes were made (but not by me) : Why We Justify Foolish Beliefs, Bad Decisions, and Hurtful Acts*. Orlando: Harcourt, 2008. p.84f..
- 27) 庄司順一、奥山眞紀子、久保田まり、『アタッチメント——子ども虐待・トラウマ・対象喪失・社会的養護をめぐる』、明石書店、2008年、151～152ページ。
- 28) Stefan Maechler. *The Wilkomirski Affair: A Study in Biographical Truth*. Trans. John E. Woods. New York: Schocken Books, 2001, p.15.
- 29) Stefan Maechler. *ibid.*, p.228. Benjamin Wilkomirski. *ibid.*, S.29～32.
- 30) Stefan Maechler. *ibid.*, p.230.
- 31) Stefan Maechler. *ibid.*, p.270.
- 32) Mark Pendergrast. *Victims of Memory: incest accusations & shattered lives*. London: Harper Collins, 1998, p.XXX.
- 33) Benjamin Wilkomirski. *ibid.*, S.143.